

郷土博 通信

No.25

2025 春



「みさをくらべ 女学校」(解説8頁)

CONTENTS

- | | | | |
|---------------------|-----|--------------------------|-----|
| ■ 「みさをくらべ 女学校」 | 1 | ■ 香川県内の銅鐸出土地とその特徴 | 5~7 |
| ■ 郷土博物館は開館100年を迎えます | 2 | ■ 「みさをくらべ 女学校」「お里の伝」について | 8 |
| ■ 展示室の紹介 | 3~4 | ■ INFORMATION | 8 |

鎌田共済会郷土博物館は開館100年を迎えます

鎌田勝太郎は、1918（大正7）年3月に慈善・育英・各種社会教育事業を目的とする財団法人鎌田共済会を創立しました。その背景には、第一次世界大戦（1914～1918年）の影響による物価高騰で困苦する人が増えたことにあります。さらに共済会は、図書館、郷土博物館、社会教育館、武道館、武蔵野般若道場など、たくさんの施設を作り社会教育活動の場を広げて参りました。これらの中で、唯一現在まで存続してきたのが博物館です。

博物館のルーツは、香川県内の歴史・地理に関する調査研究と資料収集を行う調査部が1922（大正11）年に設置されたことに始まります。その3年後の1925（大正14）年5月24日、鎌田共済会郷土博物館が開館しました。

調査部と博物館の主事を兼任した岡田唯吉は、二つの活動を連携させ、効果的に事業展開をしていきます。郷土の先人たちが長年築いてきた歴史と文化をより多くの人々に理解してもらうため、県内に散逸する資料の所在を明らかにし、かつ展示事業を通じてその価値を広く世間に紹介しました。その活動は年を追うごとに評価され、全国各地から研究者や学生が史料調査に訪れました。

しかし第二次世界大戦終盤の1944（昭和19）年6月に博物館は閉鎖となり、軍の需品廠^{しょう}として利用され、そのまま終戦を迎えます。戦後、建物は市立病院の仮診療所、神戸税関坂出支署事務所、理容学校、珠算学校として貸し出され、博物館として再開することができたのは、1955（昭和30）年のことでした。それからは蓄積されてきた約6万点の資料群を保管し守り続け、研究者による調査研究への対応が中心の期間が続きました。

2011（平成23）年、共済会が公益財団法人になったことを契機として、博物館活動の活性化が図られ、2014（平成26）年には久米通賢関係の資料1061点が重要文化財に指定されるなど成果をもたらしました。現在は定期的な展示活動や講座の開催、機関誌の発行等を活動の基軸として日々研鑽に努めています。

これからも鎌田共済会郷土博物館は、地域の人々に支えられ、引き継いできた大切なものを次の世代につなげ、さらに新しい時代を切り開くための学びの場となれるよう心をつなげて歩み続けたいと思います。今後とも皆様のご理解とあたたかいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

鎌田共済会郷土博物館



開館当時の郷土博物館
1991（平成3）年に取り壊され、博物館機能は現在の建物に移転した。



2階の展示風景
1934（昭和9）年3月11日撮影



戦時中の郷土博物館



第2展示室

（展示期間：4月～9月）

『阪出墾田之碑』に込められた想い

▲図1 『阪出墾田之碑』1829(文政12)年建立
菅原神社境内(坂出市京町)

『阪出墾田之碑』(図1)は、26行からなる本文のうち19行は塩田開墾に至った経緯や事業の責任者である久米通賢を紹介する漢文、後半の7行は墾田開発事業の成功を顕彰する「頌」である漢詩で構成されています。碑文は現代の私たちにとっては堅苦しい印象を与え、親しみにくいものですが、漢字の持つ多様な意味を汲み取れば豊かに情景を想像することができます。今回はこの石碑に刻まれた通賢の人となりや当時の塩田の様子を、国

語学者桑田明の訳釈を頼りにご紹介していきたいと思ひます。

通賢は「^{ぼくちよく} 撲直寡欲」で「^{もつと} 思量に長じて尤も世に^{やす} 便し、衆を利する^{のこと} 之事を喜ぶと云う」。すなわち素朴な人柄で正直かつ欲が少なく、他者を思いやり、世の中を良くしようという真心を持った思慮深い人物であったと賞されています。坂出墾田は総面積約200ヘクタールにおよぶ大事業でした。少ない田畑で貧困にあえいでいた民衆や、藩士たちからの信頼も篤い通賢は「^{すこぶ} 異才」があり「^{しやく} 頗る天象地理」にも詳しかったため、正に適任者だったと述べられています。

完成した塩田については「砥石のよう」に平らかで整然とした無駄のない美しさがあると表現した上で、「^{しやく} さかりの男が長柄の杓で潮水をはねかけるとその一時は小雨が降り、子どもや女が砂を搔き

払うと、塩田一面があやのある^{ちりめん} 縮緬のように美しくなる。」(図2)と重労働でありながらも生き生きと働く人々の姿も描かれています。塩づくりを生業とする民衆が増えたことで、活気に溢れた坂出の姿が目浮かぶようです。

碑は藩主、通賢、村人が心をあわせ、時を得て土地に人の手を加えて事業を成し遂げたことを刻んだものです。劣化が進み触れることが難しくなっている石碑の代わりに、展示中の拓本(図3)を鑑賞いただくことで200年前の坂出の人々の想いを受け取っていただければ幸いです。(矢野 愛)

▲図3 『阪出墾田之碑』拓本
(縦189.6cm×横117.5cm)

◀図2

【参考文献】

- ・桑田 明 編訳『香水甘冽－郷土先人の思いと足跡－』(1996)
- ・坂出市史編さん委員会『文化史さかいでシリーズⅦ 続さかいで塩物語』(2021)
- ・『郷土博通信 No.10』(2017)

第3展示室

(展示期間：4月～9月)

書画をたのしむ ー讃岐人の遺墨ー

書画とは、書道のみ作品、絵画のみ作品、書道と絵画を組み合わせた作品の総称です。毛筆による筆運びの勢いや墨の濃淡、線の太さ細さなど変化に富む豊かな表現をたのしむものであり、時には筆を執る人物の心の様まで垣間見ることができるといえるような、奥深く魅力的な芸術です。掛け軸や巻物、屏風、襖、衝立などに仕立てられ、日々の生活のなかに取り入れられてきました。書や絵を生業としていた人の書画を作品として大切にすることはもとより、武士や学者、教育者、僧侶など高い教養を持つ人々が書き残したものが、後に鑑賞の対象となることもあります。

今回の展示では、当館所蔵資料を中心に、郷土讃岐の先人たちが遺した様々な書画をご紹介します。

展示品のひとつに、高松藩初代藩主 松平頼重と、ある女性との往復書状があります(図1)。このように受け取った書状の行間に返事をしたためて返送したものを、^{かんべんじょう}勘返状といいます。また、この書状の本来の姿は紙を横に二つ折りにし、折り目を下にして文字を綴った折紙です。右端から書き始め、左端に届くと紙をひっくり返して折り目を下にした状態でさらに書き続けます。そのため紙を広げると、上半分は上から下へ、下半分は下から上へと文字の向きが逆になるはずですが、しかし、鑑賞しやすくするためでしょうか、折り目で切って下半分を反転させ、文字の向きをそろえて表装しています。上半分と下半分の下端にあるシミにご注目いただくと、その広がり方から、元のかたちをご想像いただけたらと思います。

書状が交わされたのは、頼重の生母 ^{きゅうしやういん}久昌院が亡くなって間もない頃と推定されます。女性は久昌院と親しい間柄であったと思われ、二人にとって大切な存在であった久昌院の死に対し、お互いを気遣う心優しい言葉がやり取りされています。太く力強い字は頼重が、行間にある繊細で柔らかな文字は女性が書いたものです。書状の内容もさることながら、それぞれの筆づかいの趣もおたのしみください。(宮武 尚美)



▲図1 松平頼重書状 寛文元年(1661)極月(12月)13日



香川県内の 銅鐸出土地とその特徴

第14回公開講座から
竹内 裕貴氏
(香川県教育委員会 生涯学習・文化財課)

概要

銅鐸は、弥生時代を代表する祭器であり、特に農耕にかかわる祭りに用いられたと考えられている。その分布は西日本を中心に広がり、香川県内に目を向けると、銅鐸の出土数は14点を数える。

昨年度、鎌田共済会郷土博物館に戻ってきた内間銅鐸（現在の綾川町陶内間出土）は、100年近く前に発見されたものであっても、出土時の状況や地点がわかっている貴重な例であり、その特徴について立地・埋納方法を中心にまとめることで、香川の銅鐸や弥生時代を考えるきっかけとなる資料といえる。

1 銅鐸とは

弥生時代に祭器として用いられた銅鐸は、西は九州北部、東は静岡県～長野県といった広範囲に分布し、その出土量は500点を超え、500年以上にわたって使われていたと考えられる。

(1) 銅鐸の形の変化

銅鐸は、音を鳴らす祭器として用いられ、突帯に舌を^{ぜつ}あてて鳴らしていた。

弥生時代後期に現れる突線紐式銅鐸については、さらに巨大化し、音を鳴らす祭器としては用いることができない。最終的には高さが1mを超えるようなものも現れ、装飾性も増し、「見る」ための銅鐸となる。この大きな差を評価し「聞く」銅鐸と「見る」銅鐸に大別されるほか、本来吊るすための機能を持つ紐の部分の形の変化をもとに、菱環紐式、外縁付紐式、扁平紐式、突線紐式という順番で変化することがわかっている。事例の増加も含め、文様や別の属性も含めた分類が進み、現在では更なる編年の細分化や、制作系統分類についても研究が進んでいる。

香川県出土銅鐸については、外縁付紐式銅鐸～扁平紐式銅鐸がその大半を占めており、中でも扁平紐式銅鐸の割合が多く、比較的短く限られた時期に多く香川県に流入している可能性が高い。突線紐式段階になると、完全な形での出土例はなく（伝世事例はあり）、破片の出土がごくわずかにある。他の地域の事例を見ると、銅鐸は破片となっても移動している事例が確認され、装飾品加工や、破片を埋めた事例（愛媛県上分西遺跡）、別の青銅製品の材料となるための流通が想定されることもある。

高松市天満宮西遺跡出土銅鐸は、破片の状態でもたらされた可能性の高い資料であるが、その性格は、最終段階の銅鐸には珍しく絵画表現をもち、意図して破片とした可能性もあり、そのほかの可能性を示唆する例である。

2 銅鐸の使用と埋納

銅鐸は、一つのムラや複数のムラといった単位で所有され、用いられてきた。

それらが地中から見つかる際には、ごみとして捨てられた状況ではなく、個別に地中や巨石の下に納められることが多く、ほかの物（土器や石器）と同じゴミ穴に捨てられている状況は少ない。意図的に器物を埋めることを“埋納”と呼ぶが、銅鐸等の青銅器は、埋納したと考えられるものが多い。なぜ集落にとって重要なものであった銅鐸を埋納したかについて、これまでさまざまな説が出ているが、その問題は解決していない。（廃棄説、地中保管説、境界守護説、地鎮説、隠匿説等がある）

これまで、銅鐸が各地で埋められた時期が、一定の共通性を持っているのではないかという考えがあり、弥生時代中期から後期に移行する時期と、弥生時代後期の終わりごろの時期、「聞く」銅鐸と「見る」銅鐸が、機能を終えた段階で、いっせいに埋納されたと考える説が、現在の見解としては主流となってきている。

加茂岩倉遺跡（島根県）や桜ヶ丘銅鐸（兵庫県）において、古い銅鐸と新しい銅鐸が合わせて埋納されており、最も新しいものの段階に、それまで使われていたものが、すべてまとめられ、埋納されたと考えるものである。また、新しい「見る」銅鐸の中でも、さらに巨大化した段階の銅鐸は、古い時期の銅鐸とともに埋められることがなく、もう一回の画期があると考えられている。

銅鐸が一斉に埋められたことは、地域の在り方が大きく変わったものであり、それが広域で連動することは、より意味を持つように思われる。これらの背景を、西方の、銅鐸を用いない地域（北部九州）からの軍事的圧力に対抗すべく埋納を実施したという考えもある。一方で、銅鐸を用いた祭りが、社会構造の変化も含め発生し、新たな祭りの形態（中国鏡等の使用）に変化してきたことにより、その役割を終えて埋納されたものとする説もある。内容や解釈に違いはあるものの、2つの時期に、銅鐸を埋納する動きが顕著になる点では共通している。

3 香川県の銅鐸埋納事例

香川県の出土銅鐸について考えてみると、発掘調査で確認された例はないが、発見状況から、埋納されたと考えられる事例が多い。

銅鐸は、県内に満遍なく分布しており、中讃地域において、善通寺市の我拝師山周辺に集中するのが目立つ程度である。丸亀平野の他のエリアでの銅鐸出土事例が少ないことから、広い範囲の青銅器が集まり、埋納された可能性も想定される。

全国的には、銅鐸の埋納地点は、眺望の開けた個所が多い傾向がある。香川県は、銅鐸発見地が集落域と近接するが、その眺望が限定的である例もある。また近い地点での発見も含め、同時に複数個体が見つかることが少なく、単独での埋納が多い。

4 銅鐸の埋納とその傾向について

県内の銅鐸出土事例を再度整理すると、以下の特徴がみられる。

- ・複数銅鐸の出土（埋納）事例はない。
- ・複数種類の青銅器が近接する地点に埋納、かつ年代的にもあまり整合しない（銅鐸型式が古いものと後出する武器型青銅器が近在して埋納）。
- ・周辺の集落と近い位置で出土する。
- ・集落が中期後半を境に見られなくなる例が多い。また、それに続く集落が確認しづらい。
- ・破片で発見されている事例については、集落から離れるといったことはない。

以上の特徴から、共通点（複数のものを集めて一か所に埋納する事例がない、中期後半を使用にかかる画期としうる）と異なる点（埋納箇所（平野や山間部の奥まったところや、河川に近いところ、境界的な部分）、複数種類をまとめる例、少し離れた地点に置く例）が県内でもみられる。



5 おわりに

香川県の銅鐸の出土状況を整理し、内間銅鐸の周辺において顕著に見えるように、弥生時代中期～後期にかけての時期において、集落の在り方が大きく変化しており、それに伴い銅鐸も役割を終え、埋納等により生活圏に近い位置に収められたのではないかと考えられる。

弥生時代中期後半から後期にかけてその機能を終えたような状況が確認できることから、地域社会の変化により、一斉に不要となったものを、それにまつわる地の周囲に残したと考えられる。それ以降の型式は、一部を除き香川県においては流入しなくなる。

今後の課題として、継続的に続く大規模な集落と銅鐸の関係があげられる。上で示したあり方に合致しない日練兵場遺跡（善通寺市）と森広遺跡（さぬき市）出土の銅鐸については、いずれも後世の層位から、破片となった状態で見ついている。これらの集落は、当時の瀬戸内地域でも有数の規模を誇り、弥生時代中期から後期にかけて、依然として遺構・遺物が多く確認されている。集落の内容や規模についても、むしろ拡大傾向にあるといってもよい状態の中で、どのような経緯をたどって銅鐸が使われなくなり、破片で出土することとなったかは、通常の埋納と異なったあり方が想定できる事例となるかもしれない。



『内間銅鐸調査報告』 2024年7月刊行

東京国立博物館、香川県教育委員会、当館職員による調査報告書。発見時の状況や最新研究の成果、県内の銅鐸についての情報が満載です。



※お問い合わせは当館まで
(TEL: 0877-46-2275)

『みさをくらべ 女学校』「お里の伝」について

(表紙解説)

『みさをくらべ 女学校』は、江戸時代後期から明治時代に活躍した落語家・三遊亭円朝(1839[天保10]年～1900[明治33]年)の落語の口演を速記術を用いて活字化した「速記本」と呼ばれる本です。

円朝は、1回の高座で完結する噺ではなく、長編落語を十数回に分けた続きものとし、前日の続きを翌日の口演で話す形にして、寄席にお客を引き付ける工夫をしました。さらに速記本が出版されたことで、寄席に通わなくても落語を楽しめるようになりました。

当館の所蔵本は1909(明治42)年9月付の再版本です。表紙には2種類の鏡が描かれていて、女性が愛用する道具としての「鏡」と、模範的という意味の「鑑」の両方を表現していると思われます。

同書には、お民、お蝶、お里、お婉という4人の武家の女性の「孝女・貞婦・烈女」としての噺を収録しています。そのうちの「お里の伝」は、讃岐丸亀藩の下級武士だった父・尼崎幸右衛門が、上役・岩淵伝内に殺害されたことに始まります。伝内は、幸右衛門の妻に横恋慕し、言い寄る姿を目撃した幸右衛門が咎めたところ、逆に斬り殺されたのでした。当時3歳だったお里は、叔父叔母に育てられ、16歳の時に父の仇討ちを決意、江戸に出て剣術を学び、奉公先を転々としながら苦勞の末に伝内を捜しだして本懐を遂げたというあらすじです。

これは江戸時代後期、仙台藩の大槻磐溪がまとめた『近古史談』や、岡山藩の湯浅常山が記した『常山紀談』、さらには丸亀藩が編さんした『西讃府志』(図1)などに「里也(里や)」の実話として紹介され、全国的に知られていたものでした。円朝は、主人公の「里也」を「お里」に改め、実話に彼の創作を加えて

19回の口演で完結する「お里の伝」に仕上げました。

現在、丸亀市立資料館の芝生広場には、丸亀市風袋町にあった「烈女尼崎里也宅跡」の石碑が移設保存されています。丸亀の地で円朝作の「お里の伝」を聞いてみたいものです。

(齊藤 祐司)



INFORMATION

■陶芸体験講座Ⅲ

「もようをつけてDOKI♡土器」

2025年7月26日(土) 14:00～15:30

会場：鎌田共済会郷土博物館 2階講堂

講師：黒田大・真里子先生(黒田陶房)

対象：小・中学生

参加費：¥1,000(粘土、焼成費込み)

お渡し：約1ヶ月(当館にて受取り)

●電話にてお申込み下さい。電話：0877-46-2275

【要予約、申込7月1日(火)から、先着25名】



■今後の予定 第15回公開講座

2025年10月下旬

※詳細につきましては、後日ホームページなどにてお知らせいたします。



鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分
岡山から…快速マリンライナーで約40分
JR予讃線坂出駅から徒歩5分
※駐車場あり

開館時間：午前9時30分～午後4時30分(入館は4時まで)

休館日：月曜日/祝日

夏季特別(8月13日～15日)

年末年始(12月29日～1月4日)

入館料：無料



▲図1 『西讃府志』巻第十四の内「里也」